

「済みませんでした」

井口昭久

ガソリンが心細くなったので、一方通行の道路をガソリンスタンドを探してゆっくり走っていたところ、車の左側に「どん」と衝撃が走った。

バックミラーを見ると後方に車が止まっていた。私の車とその車が衝突したらしかった。私は停車中の車にぶつかってしまったと思った。車を止めて後ろへ歩いて行くと、40歳ぐらいの女性が携帯電話を耳に当てていた。焦った様子であったが、まだ電話の相手は出ないらしく目は宙を泳いでいた。私は「済みませんでした」と謝った。

彼女は硬い表情で私を睨んだ。

た。2台の車は警察署の駐車場へ着いた。私はお巡りさんを見るなり「済みませんでした」と言った。事故の箇所の写真を撮った。私の車の左の後ろのドアがへこんでいた。彼女の車の左前方のフロントに傷がついており、サイドミラーが壊れていた。それを見て、私は「ごめんなさい」と言った。

私たちはお巡りさんと警察署内の狭い机の前で向き合った。若いお巡りさんは「それでどうしたんですか?」と私に訊いた。私は「走っていたらぶつかっただけです」と言った。女性は「道路に出たらぶつかっただけです」と言った。

横道から出てきた車が私の車にぶつかっただけというのが真相であった。私が前方の車を追い越したわけではなく、私の車の走る速度が遅すぎたのだ。

私はその時、自分に落ち度はなかったことに気が付いたが、気が付いた途端に何故か「済みませんでした」と言ってしまった。女

電話がつながったようで、「事故を起こしちゃったの」と言った。私はその言葉を聞いて、相手の車も動いていたのだと分かった。夫と思われる電話の相手としばらく話していたが、電話を切ると私に向かって「警察へ行きましょう」と言った。

私はその場の示談で済ませたかったので、「責任は全部負いますので」と言ったが、「直ぐそこですのよ」と、私をどうしても警察署へ連れて行きたいようだった。なぜか申し合わせたように数百メートル先に警察署が見えていた。彼女は私の返答を待たずに警察へ電話をした。私は被告のような気分になっ



埴輪 (はにわ)

K.

性は自分の過ちは口に出さなかった。

私はすぐに謝るといふ悲しいサガが身に付いてしまっていた。

国立大学の病院長をやっていた頃に医療事故が多発した。どのような事情があろうとも、病院内での事故の可能性があるときはすぐに謝った。

簡単な調書を取り終えて私は車に乗って警察署から出ようとしていた。そこへ女性が走って追いかけてきた。そして「すみませんでした」と小さな声で言った。

(愛知淑徳大学教授・名古屋大学名誉教授)